

# 湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所 属 保健医療学部看護学科

氏 名 三ツ井 圭子

提出日 2023 年 9 月 27 日

## 1. 教育の責任

本学では、看護基盤領域の基礎看護学に所属している。教育の主な対象学年は、1・2年生である。看護を学び始めた学生が、看護学の専門的な知識や技術、態度に初めて触れる領域となる。「始めが大事」というように、看護学に対する興味や関心を喚起させるような教育をする責任を有していると考えます。

〈現在まで担当した科目〉

科目名	必修・選択	学年	教育活動
ナーシングスキルⅡ	必修	2年生	臨床看護技術に関する演習での指導
ナーシングプロセスⅠ	必修	2年生	看護過程の演習での指導
看護基礎ゼミ	必修	1年生	1年チューターとして、大学で学ぶためのアカデミックスキルの修得を支援した。担当単元は、講義の聴き方、ノート・テイキング、レポートの書き方、発表に仕方についての授業を行った。
看護基盤実習Ⅰ	必修	1年生	初めての臨床実習の指導
統合実習・看護研究	必修	4年生	研究視点を持った看護活動を展開する臨地実習指導、および学生が実践した看護活動を基にした研究の指導

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

他人の価値観や物事の捉え方は、自分と同じではないことを念頭に置いて、学生に関わっている。たとえ間違っているとしても、その学生なりの考えがそこに存在すると思う。

例えば、大学1年生は、今まで高校で制服を着て通学していたが、大学生になったとたんに、私服で通学するようになる。今まで日常的にあったルールがなくなって、毎日何を着ようかと考えなくてはいけなくなる。高校時代には、髪の色や形、化粧の制限など、制服と同様にきびしく学則が決められていた。大学生になると、自分の身だしなみは自分で考え、今まで以上に、さらに自分らしさを追求し始める。

この状況を考えると、大学生になったばかりの学生自身も、変化に巻き込まれ、揺れ動いているのではないかと思う。身だしなみだけでなく、『『看護学を学ぶ』大学生』というアイデンティティも揺れていると考えている。1年もあれば、看護系大学の学生として適応していくかと考えていたが、最終学年になっても揺れた気持ちのまま、看護の勉強が難しい、面白みを感じないという声を聴くことがあり、残念で不甲斐ない気持ちになる。

「学生には、早く自律してほしい」と焦る気持ちが本音である。しかし、学生の関心のベクトルを看護学に傾くようにするのが、看護教員の大事な役割だと考える。

## 2) 理念をもつに至った背景

理念をもつに至る背景には、つぎの2つが根拠となっている。

一つ目として、自分自身は、厳しい制限がない学生生活を送ってきました。細かな制限はなくても、先生方から自分自身が選んで進学した学科の特徴を考え、プライドをもって勉強しなさいと折に触れ話されていました。先生方からの期待を感じながら学生生活を送っていた。

二つ目として、前期に関わった看護基盤実習Ⅰの1年生は、大学内にいる時には自由な格好をしていた。しかし、いざ、実習に向かう時期には、学生の格好が一変していた。実習ガイダンスで受けた「Ⅶ. 実習に臨む基本的姿勢・態度 5. 実習に臨む際のマナー」<sup>1)</sup>にある服装規定に応じた身だしなみとなっていた。さらに、臨地実習前の学内実習において、学生同士で「臨地実習に向けて看護学生として自覚ある学修行動をとるために大事であること」<sup>2)</sup>をディスカッションした経緯があった。

学生自身で必要性を感じ、成長を期待されることが伝わる機会があると、学生は自ずとその行動が取れるというのを認識できた。また、学生が行動したことが形になろうとしている時は、教員や指導者からの促しが無くても、学生自ら進んで学修を進めることが確認できた。

## 3. 教育の方法・戦略

今年度入職をしたばかりで、前期は科目責任者や単元を担当することがなかった。実習指導や演習指導という立場で、学生に関わっていた。今回は、その中で戦略的に学生に関わった4年生の統合実習での指導について述べる。

通常の実習では、受け持ち患者の情報を収集して、そこから必要な情報を選択し、意味内容ごとにカテゴリーを作り、アセスメントしていく。今回の実習では、学生たちに3年生の領域実習で身につけた看護の視点を十分に発揮してもらうように働きかけた。また、次年度の春からは、看護師として働くことを考え、「看護師のように考える」ことを意識して指導を行った。

具体的には、臨床実習が開始時に、受け持ち患者の病名や現在の状態の概略を伝え、必要だと思われる事前学修をして、受け持つ患者のイメージづくりをしてもらった。実習初日は、電子カルテを見ずに、まず受け持ち患者のベッドサイドに行くこと、患者と話をすること、患者に行われるケアやリハビリテーションの見学を優先してもらった。その時に学生が気付いたことや感じたことを、病室から病棟の控室に戻ってきたわずかな時間や、その日のカンファレンスで語ってもらった。教員は学生の語りを聴くことに徹することで、学生のわからないことや知らないことが見えてくる。もう少し情報があった方が、学生が体験した内容が分かったと判断した場合は、質問をして答えてもらうようにした。また、ベッドサイドでの患者と学生のやり取りを目にすることで、学生の関わりによって生じた患者の小さな変化が確認できた時、そのことを学生と共有するようにした。学生は患者の小さな変化が、学生のアプローチがもたらしたという認識が薄いことが多い。そのため、教員は意図的に患者の小さな変化とアプローチの意味を言語化して変化を伝えていった。

学生が成長を後押しするには、学生自身が自分の可能性を信じられる環境作りを大事にし

ていく。辛く苦しいだけの学修をさせるのでは、看護の面白さが辛さや苦しさに置き換わってしまう。また、学生の可能性を教員が認めていることを、しっかり伝えるのも大事な要素だと考える。学生の何気ない行動や小さな努力を見逃さず、それらを言葉で表現すること、つまり、教員自身が学生から目をそらさず、関心を寄せ続けるような教育活動を行う。

#### 4. 学習成果

- ・ 統合実習を指導した4年生の学生からもらった言葉には、「面白かった」「初めて患者さんに援助を誉められた」「電子カルテからの情報収集よりも、直接患者さんと話した方が情報をたくさん取れた」があった。
- ・ 学生は、毎日、出席をしていた。
- ・ 学生は、病棟に余裕をもって集合できるよう早めに登校していた。
- ・ 学生の電子カルテを見る時間が少なかった。
- ・ 学生は主に患者さんのベッドサイドで過ごしている時間が多い。
- ・ 患者の個人の時間には、病棟の控室で調べものや思考の整理に当てていた。
- ・ 学生の考えている内容や感じている思いは、上手に表現できないことがある。そのため、いくつもの場面を総合していくことが大切だと分かった。
- ・ 学生に教員が感じていることを、アサーティブに伝えるのは大事だと再認識した。

#### 5. 改善のための努力

- ・ 学生の気づきを大切に実習指導の展開をしたが、疾患の理解について学生がもっと自然に追求できるような発問を工夫する。
- ・ 臨床実習指導者と学生の気づきが、患者の状況のどのような部分が影響しているのか、健康障害の根拠や看護ケアにどのように繋がっているのかについて、指導の共通認識を更に強化する。
- ・ 学生に修正してもらいたい学習行動や学習内容をアサーティブに伝える技術を磨く。

#### 6. 今後の目標

後期は、ナーシングスキルⅠで「活動・休息」「食生活・栄養摂取」「排泄」の単元を担当する。また、後期は2年生の看護基盤実習Ⅱがあり、2年生は初めて患者さんを受け持ち、必要な看護ケアを見だし実践する実習を行う。

講義・演習では、患者さんの健康障害と生活援助の繋がりが理解できるように、具体的な事例を使い、単なる援助技術だけでなく、学生自身でも何故この看護ケアが必要なのか、看護ケアの根拠に基づいた工夫を考えられるように工夫を行いたい。

実習では、学生の気づきの背景を学生の言葉で表現できるように関わっていく。また、健康障害や患者さんの心情や社会的背景にも目を向けられるような、発問ができるようにしていきたい。

**【添付資料】**

1)2023 年度 臨地実習ガイドライン

2)2023 年度 看護基盤実習 I 学内実習 3 日目の資料